パネルデータ

川田恵介

1 Panel Data の活用

1.1 パネルデータ

- ・ 同一事例を追跡調査したデータ: 事例i について、複数時点 t の $\{Y_{it}, D_{it}, X_{it}\}$ が観察可能
 - ▶ 動学効果の推定や新しい識別方法などが活用可能に!!!
- **要約/推定方法**が、急速進歩 (Baker et al., 2022; De Chaisemartin & d'Haultfoeuille, 2022; Roth et al., 2023)
 - ▶ 実証結果に深刻な影響 (Baker et al., 2022)

1.2 例

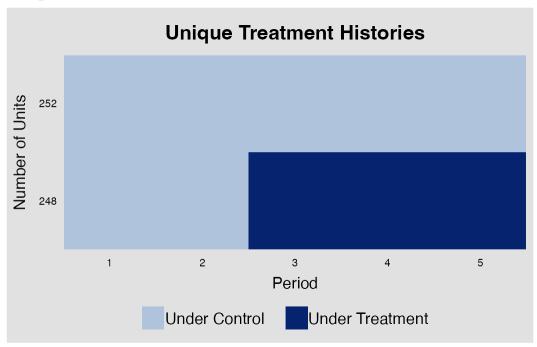
#	A ti	bb	le: 9 ×	5		
]	D	Period T	reatGroup	Υ	D
	<int< td=""><td>:></td><td><int></int></td><td><int></int></td><td><dbl></dbl></td><td><dbl></dbl></td></int<>	:>	<int></int>	<int></int>	<dbl></dbl>	<dbl></dbl>
1	-	1	1	1	-1.71	0
2) -	1	2	1	-8.94	0
3	}	1	3	1	-10.5	1
4	ļ	2	1	1	-6.26	0
5	,	2	2	1	4.24	0
6	j	2	3	1	-1.94	1
7	,	3	1	1	11.6	0
8	3	3	2	1	5.59	0
ç)	3	3	1	5.88	1

1.3 推定対象: 動学効果

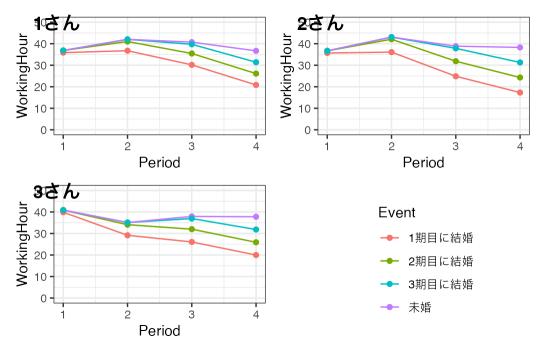
- 多くの介入で、効果は介入からの期間に応じて変化しうる
- 介入が発生した場合、しなかった場合の差
 - \bullet いつ介入したか (j) + 介入からどのくらい経ったか (l) に応じて、大量に定義できる
- ・ 例: 2024 年における労働時間についての因果効果
 - ▶ 2023 年に結婚 VS 未婚のまま (j = 2023/l = 1)
 - ▶ 2018年に結婚 VS 未婚のまま (j = 2018/l = 1)

・ 2018 年に結婚後 5 年 VS 未婚のまま (j=2018/l=5)

1.4 panel view



1.5 例



2 因果効果の要約

- ・ 1期間の平均因果効果と比べて、因果効果の要約方法がより大量に存在する
 - ▶ どのような要約方法を採用するか、明確に定める必要がある

2.1 平均動学効果

- ・ 介入から / 期後の平均効果を集計
- E[個別効果 |l]

2.2 コホート別平均動学効果

- 介入した時点jごとに、介入発生からl期後の平均効果を集計
- E[個別効果 | l,j]
 - ▶ 例: 結婚の効果は、時代によって異なる
- 平均動学効果の推定においても、重要な役割を果たす

3 識別

3.1 識別の仮定

- これまでと同様に、Positivity/No interference
- ・ 緩和した Conditional independence: Parallel trends
- No anticipation

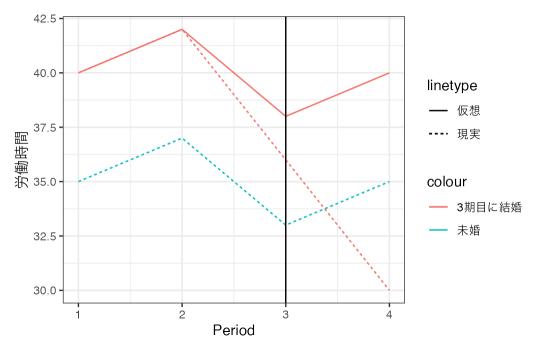
3.2 No anticipation

- ・ 将来の介入は、過去に影響を与えない
 - ▶ 例: 2024 年に未婚から既婚に変化しても、2022 年の労働時間は変化しない

3.3 Parallel trends

• 介入が生じなけければ、「介入が生じなかったグループ」と平均的に同じ変化をする。

3.4 例



3.5 Parallel trends の利点

- ・ RCT/自然実験により保証できる
 - それ以外では?
- 実践的な利点は、介入発生前に複数期間あれば、部分的なテスト (Before-Before/ PreTrend test)が可能
 - ▶ Event の発生状況に関わらず、Y は同じように推移している
 - ► Roth (2022)

3.6 補論: コントロール変数の導入

- 条件付き Parallel trends: 同じ X 内で Parallel trends が成り立っている
 - ▶ 固定効果モデルでは、時間を通じて変化する変数しかできない
 - ▶ 推定方法を工夫する必要がある

4 推定: 2×2 Case

$4.1 2 \times 2$ Case

- 2 期間 × 2 グループデータ
 - Control Group: 介入が生じない

- ▶ Treatment Group: 2期目に介入発生
- ・ 確立された推定方法が存在
 - ・パネル分析法の良い出発点

4.2 Two Ways Fixed Effect Model

• 固定効果モデルを推定:

$$Y_{i,t} = \tau D_{i,t} + \underbrace{f_i}_{\text{個人固定効果}} + \underbrace{f_t}_{\text{時点固定効果}} + u_{i,t}$$

- ▶ OLS と同様の方法 (データへの適合度を最大化する)で推定可能
- ▶ 追加の仮定を導入することで、推定精度を高める方法(変量効果モデルの最尤法による推定)もある
- 識別の仮定のもとで、Average Treatment Effect on Treated について"信頼できる"信頼区間形成が可能

4.3 R Example

```
fixest::feols(
  Y ~ D + factor(Period),
  DataShort,
  panel.id = "ID"
)
```

5 Reference

Bibliography

Baker, A. C., Larcker, D. F., & Wang, C. C. (2022). How much should we trust staggered difference-in-differences estimates?. Journal of Financial Economics, 144(2), 370–395.

- De Chaisemartin, C., & d'Haultfoeuille, X. (2022). Two-way fixed effects and differences-in-differences with heterogeneous treatment effects: A survey.
- Roth, J. (2022). Pretest with caution: Event-study estimates after testing for parallel trends. American Economic Review: Insights, 4(3), 305–322.
- Roth, J., Sant'Anna, P. H., Bilinski, A., & Poe, J. (2023). What's trending in difference-in-differences? A synthesis of the recent econometrics literature. Journal of Econometrics.